

青少年の主張



「小さな社会」

佐藤 朱音 さん（坂祝中学2年生）

皆さんにとって、学校とはどういう場所ですか。勉強するところ、友達と会うためのところ。それぞれが思うことがあると思います。

私は「学校」とは、「小さな社会」だと思います。周りの仲間は一人ひとり違って、勉強が得意な人もいれば、話すのが上手な人もいます。本を読むのが好きな人もいれば、昼休みには必ず外に行く人もいます。みんなが違います。そして、中学校では先輩・後輩の関係があって、それは社会の上司と部下のようなものだとも言えます。

そうして「学校」という場所では、これから社会に出たときに必要なことを学んでいくのです。

坂祝町は小学校が一校、中学校が一校しかありません。だから、ほとんどが幼稚園、保育園からずっと一緒です。でも、私がみんなと出会ったのは、小学校1年生のときでした。途中からみんなの中に入ることに少し緊張したのを、今でも覚えています。でも、みんなは私のことをすぐに受け入れてくれました。とてもうれしかったです。

小学校の5年間は、みんながお互いのことを受け入れることができている、私たちの間には「平和な社会」が築かれていたと思います。

しかし、最上級生に近づくとつれ、次第に私たちの「社会」の歯車は狂い始めました。悪口や陰口が増え、最初は男子から女子にからかうように言っていたものが、いつからか女子同士でも飛び交うようになりました。私もその標的になったこともありました。私は自分が自分らしくいることがいけないことなのかと傷つき、仲間の中にいるのが苦しくなりました。

そして、中学生になり、仲間への誹謗中傷はエスカレートしていきました。自分の納得いかないことが起こるたびに、仲間のことを軽い気持ちで傷つけるような言動が見られました。さらに、小学生の時にはなかったはずの「グループ」ができ、何となく話しやすい子、話にくい子ができました。

そして、様々な問題が起きるたびに、私たちは「人権を大切に」と何度も言われてきました。それを私は、心のどこかで「そんなこと言ったって…」、「人権を大切にすると、具体的にはどうすることなんだろう?」と思っていました。

中学2年生の私の願いは、一つです。

もっとみんなと笑顔で過ごしたい。

私は、同じ教室で勉強して、他愛のないことをしゃべって、部活をして…。そうして一緒に過ごしてきた仲間が大切です。みんなと一緒に楽しい学校生活を送りたいです。私も、周りの仲間も「楽しい」、「過ごしやすい」と思えるような「学校生活」、つまり、「社会」にしたいのです。

そのためには相手を思いやるが必要不可欠です。私も、私の周りの仲間にも、個性があります。得意なことも苦手なことも違います。もっている意見もそれぞれです。それは、当たり前のことです。しかし、今の私たちはその当たり前の違いを受け入れることができていません。自分と意見が違うから相手を傷つけ、排除しようとする。そうやって自分のことばかりを考えているから、私たちの小さな「社会」は崩れ始めてしまったのだと思うのです。

私たちの小さな「社会」を築きなおすために必要なのは、自分とは違う相手のことを知り受け入れる優しさではないでしょうか。

小さいころから一緒にいたこの仲間といられるのも、あと1年と少しです。たった1年。あと1年しかない。まだ1年もある…。感じ方はそれぞれでしょう。私たちは高校生になると、それぞれが自分の進路を選び、初めて「坂祝町」という小さな「社会」から飛び出さなければなりません。それは、私たちにとって、楽しみな事でもあり、とても不安な事でもあります。

この小さな「社会」を飛び出すその時に私自身も、私の大切な仲間も、「この仲間と一緒にいられてよかった」と笑顔で言って「小さな社会」から「大きな社会」へと飛び立っていきたくと思います。

そのために、私は残された1年という時間で、もっと仲間と一緒に勉強や部活で関わり合い、お互いのことを知るチャンスを見つけていきます。そして、自分と相手のことを理解していきたくです。

青少年の主張



「バングラデシュへようこそ」

ミア モハマド シャハジャマンさん (中日本自動車短期大学)

皆さん、はじめましてこんにちは。私は、バングラデシュから参りましたジャマンと申します。皆さんは、バングラデシュについてあまりご存知ないかもしれません。バングラデシュは、周りに沢山の川があって、緑が多くて小さな国ですが、人口は日本に比べて多く、2018年の国勢調査によると1億6千万人です。

バングラデシュは、1971年にパキスタンから独立しました。この戦争では大勢の人が亡くなりました。バングラデシュの国旗は日本の国旗と似て、真ん中に赤い丸があって周りは緑色です。国旗の真ん中の赤は1971年の戦争で亡くなった人の血の色を表し、外側の緑色は豊かな景色の緑を表しています。バングラデシュの首都のダッカは歴史的な町で、古い昔のモスクや大事な建物が沢山あります。

またバングラデシュには有名な人が沢山います。中でも、Dr.MOHAMMADOYOUNUS (ムハマドユヌス) は、2006年にノーベル平和賞を受賞しました。彼は、村の貧しくてお金が足りない人に無担保で少額の資金を貸し出すマイクロ・クレジットを作りました。このマイクロ・クレジットシステムは新しい貧困対策として国際的に注目され、主に第三世界へ広がっています。

さて私たちの言葉はベンガル語ですが、1952年まではその言葉を自由に話すことができませんでした。バングラデシュの人は母語のために反対運動し、兄弟や友人がたくさん亡くなりました。ところが、その人達が流した血のおかげで1952年から自由にベンガル語で話せるようになりました。それで毎年2月21日は記念日としてとても大事に守っています。

それから、バングラデシュから世界中に輸出されているものがあります。それは衣類と薬です。衣類は世界第二位の輸出国になりました。薬も世界144か国に輸出しており、世界中から注目されるようになりました。国は経済的な問題がありますが、近年はどんどん成長を続けている国です。

お祭りはたくさんありますが、最大のお祭りは「EIDUL FITRE と EIDUL AZHA (イード・ウル・フィトルとイード・ウル・アドゥハ)」です。一か月間断食をしてお祈りをし、新月が見えると断食が終わり、花火をします。それから家族親戚みんなが集まって、ごちそうを作って食べたり、旅行したりします。家族団らんの時です。ヒन्दュー教のお祭り DURGAPUJAでは、お寺で一年間の無事を祈り、ダンスや歌を歌って、神様にお供えします。そして最後の日は、神様の形の大きな人形を車に乗せてパレードをし、それを川に流します。そのほかに、バングラデシュには120キロの世界最大のビーチがあり、イルカを見ることがもできます。自慢できる果物屋料理も沢山あります。

皆様バングラディッシュへようこそ。ぜひ美しいバングラディッシュをお楽しみください。

青少年の主張



「自分で人生の価値を見つけよう」

ディリヤール ディリシャティさん（中日本自動車短期大学）

私は、日本に来て間もないころ、ずっと世界は不公平だと感じていました。私は家庭の経済状況があまりよくないので、生活の面でもお金を節約し、できるだけ多くのアルバイトをして生活費と学費を稼がなければなりません。しっかりとご飯を食べられないときや、時には食事をする時間さえないときもありました。朝4時にアルバイトに行くと、夜は疲れてしまっていますが、学校の勉強もあり早く寝られません。毎日睡眠不足のため、記憶力がだんだん低下し、髪の毛も大量に抜けてしまったこともあるほど大変でした。しかし、周りの友達を見ると、みんな気楽に楽しく過ごしていました。毎日いろいろな料理を食べたいだけ食べたり、毎日自然に目が覚めるまで寝られたり、毎週旅行に行ったり、ほしいものは何でも買えるようでした。アルバイトをする必要もなく、生活費や学費の心配もなさそうな彼らを見て、私はこの世界があまりにも不公平だと感じ、このような格差をどう受け入れることができませんでした。気分がますます落ち込んで、タバコを吸い始め、お酒を飲んで自分を麻痺させるようになってしまいました。なぜお金持ちの家に生まれなかったのかと幾度となく思ったものです。

そんな現実逃避を繰り返していたある日、ある女の子に出会って、私はやっと目が覚めたのです。その日私は、お酒を買うためにスーパーに行ったのですが、そこでその女の子と出会いました。驚いたことにその女の子は両足がひざから下がなくて、車椅子に座っていました。そしてお母さんに車椅子を押されて、私の前を通り過ぎていったのです。私の前を通り過ぎる際、彼女はお母さんと話しながら本当に嬉しそうに笑っていました…。なのに、自分を見ると…、手にはお酒を持ち、全身タバコのおいだらけの自分がそこに立っていました。その女の子の、幸せそうな笑顔の中に、現実に負けない楽観的でありながら強い精神力を見て、自分はあまりにも弱すぎると感じました。もし、私があの子の女の子だったら、あんなに楽観的に自分の人生と向き合えないかもしれません。でもその女の子は、私の考えさえ及ばないことを乗り越えてきたのでしょ。私が今苦しんでいることは、彼女が経験していることとは全然比較にもなりません。彼女は足を失ったとき、どれほどのショックを受けたのか、どれぐらいの時間をかけて、その苦しみから這い上がってきたのか、どうやって今のように自分と、そして人生と向き合えるようになったのか、考えれば、考えるほど私は心が痛くなりました。その場で本当に心臓を刺されたように痛かったのです。私は自分がその場でどれぐらいぼーっとしていたのか分かりませんが、気がつくともう彼女たちの姿は見えなくなっていました。その後、私はお酒を元の場所に戻して寮に帰りました。帰り道でずっと反省していました。私はその時まで、自分の安い古靴を見て、高い靴を履いている人を羨んでいたのです。でもこの世界の中には、私の靴をうらやましく思っている人が、更には私に足があることをうらやましく思っている人がいるかもしれないということに気が付かなかったのです。その女の子にとって、立って歩くことさえ夢になります。それに比べて健康な体を持っている私は、もっと楽観的に人生と対峙すべきではないだろうかと思いました。

確かに世の中には不公平なことが多いです。でもそんなことを悩むより、今の自分にできることを考え、今持っているものを大切に、努力して生活する方が賢明ではないだろうか、他人との比較ではなく、自分の人生の価値を見つけ、あくまで今を懸命に生き、自分の人生の楽しさを追及して暮らすべきではないかと思に至りました。

人生の中で運命づけられたのは一部だけです。自分の人生で自分が努力さえすれば変えられることは、まだまだたくさんあるはず。でもそんなことを悩むより、今の自分にできることを考え、今持っているものを大切に、努力して生活する方が賢明ではないだろうか、他人との比較ではなく、自分の人生の価値を見つけ、あくまで今を懸命に生き、自分の人生の楽しさを追及して暮らすべきではないかと思に至りました。

人生の中で運命づけられたのは一部だけです。自分の人生で自分が努力さえすれば変えられることは、まだまだたくさんあるはずです。